

東アジア日本語教育・日本文化研究学会 (9)

― 一般市民の参加自由の学会 ―

福岡大学人文学部教授

藤井茂利

「アカシアの大連」と大連には清岡卓行の小説のように「アカシアの」と形容詞が付けられるのが普通になった。それ程この作品は清冽な印象を世間に与えた。

事実、アカシアの花の咲く頃、大連のどの道路も両側の並木から甘酸っぱい香りがあたり一面に漂っていた。その印象は今も忘れられない。あゝ懐かしい哉、わが生まれ故郷大連よ。

第三回の研究発表会は大連外国語学院で開催することになった。「学院」とは日本では学校のことであるが、学校名の中に「学院」が組み込まれると、例えば「西南学院」とか「関西学院」とある学校はキリスト教系学校に大体なっている。

韓国で「学院」と言えば一般に「学習塾」のことを言っているようである。中国では学院は日本の「大学」の意と同じであるようである。



大丸よこ
(731)2480
学会の開
催校通知

に「大連外国語学院」と

書いて出した所、少し
気になるという連絡を
多く受けた。多くはや
はり韓国の方からであ
った。国際学術大会を

「塾」のような民間の建物として「学会」と認めて貰えるのか、というのが心配の内容であった。

大連外国語学院と言えば中国政府肝いりで設立された中国切つてのいい大学である。中国各地から外国語の勉強に來ている。日本語学習の学生数も八百名いる、と聞く。専攻か専修か判らないが、その数だけ聞いても驚く。先生も二百名近くおられると聞く。これ又驚くべき数である。今は日本語ブームであると良く耳にするが、どうしてこんなに日本語を学習する人が多くなったのか本当に不思議である。

日本から韓国に渡るにはフェリー、飛行機ありで少し大きな集団でも何とかなる。「日本語教室 in 釜山」を開いた時も、20名の乗船券ビートルⅡも満席といわれて困っていたが、韓国で確保してもらい何とかなった。或る意味では飛行機よりビートルⅡが便利であった。万一これも満席でも「関金フェリー」か「カメラライン」の二等客室なら何とかなる。韓国への渡航は今まで

このような様子であった。

中国は九州から海を隔てた隣国であるには間違いないが、そこに渡るには韓国のように簡単にはいかない。第一この国に入るにはビザがいる。団体で行くのであればパスポートの顔写真のあるページのコピーと三千円の手数料で業者に依頼すれば簡単に事が運ぶが、個人ですると大変である。写真、少し高くなる手数料を持って中国領事館に行く。時間もかかる。

そこで大連の学会に行く人の募集を始めるが、これが又大変。期限を切つていても発表の申し込みも少ない。こんな事では学会の存立そのものがどうなるか心配であったが、各人に攻撃的に打診してみた所、発表したいが未だ論がまとまらないので迷っているという返事が大部分である。

人間は妙なもので、たとえ仮題でもポスターになって貼り出されると、それに向かって進み出す。そして自分なりの結論を出してくる。今はその結論の適否は別の問題にするが、ともかく結論に合理性を持たせるべく論をまとめようとする。迷っているまゝ発表を放擲すると零に帰する。非常に不安でも初めから発表に百%自信のある人など余程の人で、これで良いのか迷いながら、発表しているのである。

かくて日本側は10名の発表者が決まって面目は立つ。在韓の日本人も3名加わる。中国が3名でやゝ少ないが、中国の人には本学会の発表会が初めてであるので、様子見をしている節があった。3名でも発表して下さることで安心した。韓国側の発表者も10名を越えるというのでポスターの印刷の依頼を出した。

発表者が決まってもその他雑務係が若干名必要である。会場が大連であっても進行係、連絡係などは日本人の方が何かにつけて便利である。その他、発表を聞くのみの人も何人か出るに違いない。仮にその人達を10名と見込んで、JTB中国にホテル、航空券の予約を申し込んだ。

幸いなことにJTB中国に福大学院卒の中国人の教え子が就職している。スケジュールを見せ、諸手続を依頼した。ホテルは所謂五つ星のホテルが通常の半額で予約できたが、航空券は福岡からは全く席がないと言う。11月の連休であるので少しは厳しいと思ったが、こうなることは思わなかった。高額のなら一、二の空席はあると言つたが、これでは問題にならない。困り果ていたが実行委員の一人、讀賣新聞の水内純清氏が何とか讀賣旅行にかけあつてみようと言われ、依頼した。